「サッカー王国」静岡の歴史的研究

A History of soccer in Shizuoka as “the Kingdom of soccer in Japan”

1K10C058-1
主査 石井昌幸 先生

岩崎 大地
副査 武藤泰明 先生

【はじめに】

筆者が生まれ育った静岡県は以前から「サッカー王国」として名を馳せてきた。しかし、近年静岡サッカーは「サッカー王国」と言われるだけの結果を残すことができていない。それはどうしてなのか考えているうえで、それではなぜ以前の静岡は「サッカー王国」と言われるまでになることができたのかを明らかにすることは有効であろう。そこで本研究では、静岡が「サッカー王国」と言われるようになるまでとJリーグ発足以後の状況、現在の静岡サッカーの衰退について歴史的に検討する。

【第1章 Jリーグ開幕以前の静岡サッカーの歴史】

静岡にサッカーが伝わったのは大正時代の初期から中期にかけてであり、東京師範学校の卒業生によって普及された。それから時は経過し、1960年代後半、堀田哲爾氏を中心にして日本で最も早期に清水FCや小学生リーグなどの育成指導システムが作られた。このように静岡において早期に誕生した指導体制と熱心な指導者の存在が1980年代から1990年代前半における高校サッカーの好成績に繋がり、それによって日本中から静岡サッカーが一目置かれるようになったと考えられる。

【第2章 清水エスパルスのJリーグ加盟】

1980年代後半に日本のプロサッカーリーグ構想が始まった。その後何度も行なわれた協議の末、日本初のプロサッカーリーグであるJリーグの創設が決定。Jリーグの創設が決まると、清水でもプロチームを作ろうという動きが出始めた。その活動の中心を担ったのはテレビ静岡内のプロジェクトチームである。彼らをはじめとした多くの人の奮闘の結果、清水に念願のプロサッカーチームが誕生した。清水エスパルスは当時Jクラブ唯一の「市民球団」であり「Jリーグの理想に最も近いクラブ」と言われた。

【第3章 清水エスパルスの解散危機】

1993年にJリーグが開幕すると日本中が「Jリーグブーム」に沸いた。Jリーグ初年度は全180試合で323万人の観客動員を記録。しかし、「Jリーグブーム」が長く続くことはなかった。Jリーグの人気は徐々に低迷し、それに伴って収入が減少したクラブの経営は厳しいも

のようになっていった。そして1997年、清水エスパルスは解散危機に陥った。世界的な企業を親会社に持たず、赤字補填ができなかったことや運営会社である「エスラップ・コミュニケーションズ」の経営姿勢も解散危機を招いた要因であった。

【第4章 清水エスパルスの再建と現在までの軌跡】

清水エスパルスが解散危機に直面した中で立ち上がったのは「市民」であった。ファンや市民はエスパルス存続を願って署名活動や募金活動を展開。この市民の熱意は地元の経済界を動かし、地元企業9社が出資してエスパルスを支援していくことが決定。これにより清水エスパルスは土壇場で解散を免れることとなった。その2年後、1999年シーズンにはステージ優勝を達成。解散危機を乗り越えてこの優勝はホームタウンと市民によって支えられ勝ち取ったものだった。それからのエスパルスはアジア制覇や降格争いを経験。現在に至っている。

【第5章 清水のサッカーを通じたまちづくり】

清水市は1991年に「サッカーフレンドシティ構想」を策定。清水市役所の企画調整課に「サッカーのまち推進室」を設置し、「ひとづくり」「まちづくり」「交流」を三本柱に様々な取り組みを行ってきた。また2003年の合併により静岡市となってからもこの取り組みは継続され、2003年には新しい「静岡市サッカーフレンドシティ計画」が発表された。新しい計画ではイベント開催などソフト面の事業の更なる充実を掲げ、現在も「サッカーのまち」としての取り組みは続いている。

【おわりに】

静岡のまちのアイデンティティとしてサッカーがある。「高校サッカーの繁栄」、「清水エスパルス」、「サッカーを通じたまちづくり」の3つの要素は静岡のまちを1つにして、全国の人々に「サッカー王国静岡」を認知させる要因となった。今後、「清水エスパルスのホームタウン」としてより一層行政と市民が一体となってクラブを支え、これからも静岡が「サッカー王国」として全国に誇ることができるような清水エスパルスの活躍と「サッカーのまち」としての更なる発展に期待したい。